
願いの果てに

taktoto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願いの果てに

【Nコード】

N1890H

【作者名】

taktoto

【あらすじ】

平凡なサラリーマンの植草。ふざけた態度とずる賢い考え方で毎日をのらりくらりと過ごしていた。舞台はある日の仕事で、いつもの作戦で会社を抜け出した植草を待つのは悲しい結末だった。

(前書き)

本編中の名前は実在する人物・名称とは一切関係ありませんので、
予めご了承ください。

「またお前かつ！この馬鹿が！！」

社内に響き渡る罵声。その対象はいつも決まった人物で、周りの社員は平然とした様子。

当の本人も表情一つ変える事無く、罵声を浴び続けていた。

「聞いているのか！植草！」

依然無表情な植草の態度にヒートアップする上司。

そんな上司に疲れたのか植草がボソボソと重たい口を開いた。

「谷口部長…。」

相変わらずイライラしている谷口部長から、少し視線を外しつつ言葉を続ける。

「もう外回りの時間なんで、話は後でゆっくり聞きますから。」

どうにも胡散臭い植草の言葉であったが、もし本当であればこの説教で仕事が取れない可能性もある。そんな事が頭をよぎり、すつきりしないが植草を外回りに出す事にした谷口。

「…わかった。後でたっぷり説教してやる。さっさと行け！」

その表情は誰が見ても怒りがあらわになっており、口元が引きつっていてかなり怖い光景。

その言葉を聞いた植草は一礼して外回りに出る。心なしか表情は緩んでいるようだった。

というか、ニヤニヤした表情で「してやったり」という印象を受ける。

半ば呆れ気味に見送る周りの社員達。外は少しずつ雲が空を覆い始め、なんとなく不安の色を写し出したかの様だった。

「俺って天才だな」

気分上々と言った所か。いつものパターンならば、これから一日の予定を考えつつ、昼食と暇つぶしがてら漫画喫茶へ行くのだが、パラパラと小雨が降ってきた。

「…とりあえず、雨宿りだな。時間もあるし。」
どこかに雨宿り出来る場所はないものか。周りを見渡すが、良さそうな場所もない。

そんな事を考えている間にも雨はどんどん強さを増しており、考えている時間もなさそうだ。

「…とりあえず、走って探すか。」

頭が濡れない様にバッグで傘代わり。街中を一人走り続ける。

「…普通なんかあるだろ！雨宿り出来る所が！」

走っても何も見当たらない状況に、苛立ちを見せる植草。すると目の前には1つの鳥居が見える。

「…なんか有りがちに幽霊とか出そうだな。まあ、他に見当たらないしな。濡れるのはゴメンだ。」

駆け込んだはいいが、やはり予想通り何か居るようだ。

「…やっぱり。」

これほど予想通りの展開だと逆に笑えるのだろう。ニヤニヤしながらその何かに近寄ろうとした。

が、向こうから声を掛けられた。少しばかりの緊張に嫌な汗が出る。

「誰？私を迎えに来てくれたの？」

幼い声が雨音の合間を縫って聞こえる。

幼い声に安堵のため息が出るが、油断はならない。子供の幽霊だっているのだから。

「ごめんなー。お兄ちゃんも雨宿りしにきただけなんだ。」

精一杯明るく努め、子供に呼びかけるが反応は無い。緊張しつつ

近寄って見るが、雨が酷くかなり近くまで寄らないと顔が見づらい。

「お兄ちゃん濡れるからさー。隣いいかなー？」

もう一度呼びかけてみるが、相変わらず反応は無い。

よく見ると、四本脚に鋭い爪。鋭い牙に艶やかな体毛。

「猫じゃん…」

まごうこと無く猫がいる。

「ニヤー？」

何か言っているようだが、猫語を理解できる程ぶっ飛んでもいいい。

「お前びっくりさせんなよー。とか言ったら人間になるとか…。」
どうやら妄想が止まらないらしく、一人で猫を相手にブツブツと喋っており、周りから見れば充分ぶっ飛んだ人間である事に違いない。

「五月蠅いんだよ!!!」

突然猫が喋った。植草は予想通りと言った表情ですぐに切り返す。
「今時そんなありきたりな展開でビビるか!!!」

猫が逆に驚いた様で、体はプルプルと小刻みに震えている。その様子を見ると少し可哀相ではあるが、ここで良心に負けてはいけない。なんと言おうが相手は喋る猫、化け猫だ。

「そうやって人を食い物にしてるんだらう!? 残念だったな…。俺には通じない。」

勝ち誇る植草を見て、ついに猫の怒りは爆発した。

「…コロスぞ。」

先程とは打って変わった猫の声。しかし想定範囲内ではあった。
「出た出た…。定番なのそれ?マジ笑える。」

小馬鹿にした植草の態度に猫は苛立ちを募らせる。

「お前の様な人間は許さない…。」
そう呟いた猫の眼が本気で怖くなってきた植草。さすがにふざけ過ぎた。

このままでは何をされるのか分からない。

そう考えたのか、植草は猫を放り投げ一目散に駆けだした。

「うわぁー!!!」

全速力で駆け抜ける。気づけば公園に辿りつき、雨も上がりつつあった。

太陽の光にほつとし、冷静に辺りを見渡すと何もなかったが少年二人がキャッチボールをしている。

そんな光景にほつと一安心。少年の一人は母親が迎えにきたよう

で、手を振りながら挨拶をしている。もう一人の少年はつまらなそうに壁に向かってボールを投げ始めた。

「俺もそろそろ帰るか。」

立ち上がる植草をじつと少年が見ていた。思わず声を掛ける。

「どうした？」

少年は少し困った様な表情をした後、植草にあるお願いをした。

「お兄ちゃん、キャッチボールの相手してくれないかな？」

一瞬悩んだが、仕事上がりまではまだ多少時間はある。

「いいぞ。相手してやる。さあ、来い！」

嬉しそうに少年がボールを投げ始めた。

どれくらい経ったのか、少年は満足そうな笑みを浮かべていた。

「有難うお兄ちゃん！お兄ちゃんは僕にお願いごとない？キャッチボールのお礼に何かしたいんだけど…」

子供の出来る事など、たかが知れているし特に期待もしていない。

「いいよ。そんな事は何かして欲しいからやった訳じゃない。」

明らかに格好つけたその台詞は半分本心だ。

「…そうだなあ、お前が大きくなったらムカツクやつを消してくれよ。じゃあな。」

あはは、と笑いながら応えてその場を去る。

「分かったよお兄ちゃん！！」

笑顔で手を振っている。どうやら意味を分かっているのだろう。知る必要もないが。

「これで十年後とかに約束を果たしにきたよ。とか言っ出てきたりしてな。」

まあ、それはそれで面白いかな。俺って本当に嫌な性格だな。」

そう言いながら、頭の中は谷口部長への言い訳を考えるのに必死であった。

「部長がこう言ったら…ああ言っって…。」

一人ブツブツと言いながら会社へ戻る。しかし、自動ドアが開かない。

「あれ？故障？嫌がらせ？」

全く反応しない自動ドアを無理やりこじ開け、オフィスへと戻る。
「お疲れ様です。植草戻りました。」

いつもの様にそくさと自分の席へ戻るが、そこには辞めたはずの同僚が座っている。

「…お前、辞めたんじゃないのか？てゆうか、俺の席…。」

おかしい。周りの社員は誰一人として反応しない。今まで無視された事もあるが、明らかに状況が違う。ふとオフィスにある姿見が目に入る。そこにはあるべきものが映っていない。

「…俺が…映っていない…!？」

半分パニック状態に陥り、あわてて周りの人間に声を掛ける。

「おい!!俺を見るよ!!おいっ!!!!!!」

誰一人として反応する者はおらず、何事も無かったかのように普段と変わぬ仕事をする社員達。そんな時谷口部長の声が響き渡る。

「またお前かつ!この馬鹿が!!」

普段ならイライラするその声も、今では神の様な神々しさを放つ。

「ぶちよ…!？」

部長に話しかけようとするが、先に反応したのは元同僚の田淵という男。

「すいません部長。」

自分の目の前で田淵が谷口部長に怒られている。なんとも言えない絶望感が植草を襲う。

「なんで…なんでこんなっ!？」

そんな植草を田淵が振り返って見ている様だった。田淵と視線が合い、不思議な感覚に囚われる。まるで昔会った事のある様な…。

「クスッ」

田淵の笑い声が聞こえた。

「なんだその態度は!？反省してんのか!？」

谷口部長の激が飛ぶ。

「すいませーん…。以後気を付けますよ。部長。」

そう言い残すと田淵は植草に向かっていく。植草は状況が更に分からなくなり、困惑していた。田淵が近づいて来る…。思わず後ずさりをしてしまう。

遂に田淵は植草の1m手前まで来た。嫌な汗が止まらない。田淵の口がゆっくりと開く。

「…久しぶりだね。」

植草は状況が理解出来ていない。口をパクパクさせ、何か喋ろうとするが声にならない。

「…!？」

田淵はそんな植草に構わず話を続ける。

「もう忘れたのかい? 『お兄ちゃん』…。」

その声はあの時公園で聞いた少年の声そのもの。ようやく状況が理解出来てきた。

「まさか…お前っ!!」

植草が問い詰めようとした瞬間、田淵が大声で笑いながら遮る。

「あははははははは!! あなたが望んだんじゃないか!!! この状態を! あの時! 僕につ!!」

その顔は鬼の様に少年の様に植草の瞳に映った。

「そんな!? 『ムカツクやつを消してくれ』とは言ったが…俺を消せとは言っていない!!」

背一杯の反論を行う。だが、田淵は嘲笑うかの様に告げる。

「そこに誰かを『指定』してはいないでしょう…? だから僕にとつてムカツクやつを消したただけだよ!!」

以前として植草を嘲笑う田淵。少年に恨まれる様な事をしたのだろうか…と、どれだけ考えても思い当たる節はない。

その眼はまるで人とは思えないくらい冷ややかだった。

しかし、この眼は…どこかで見たような…。そんな感覚を植草は感じた。

「もしかして…お前は…あの時の…?」

ニヤツと田淵が笑う。植草は全てを理解した。こいつは…あの少

年は…化け猫だ…。

「ようやく気付いたのかい？言っただろう…。」

植草はその場に崩れ落ちた。放心状態の植草に向け田淵は冷たく言い放つ。

「…お前の様な人間は許さない。」

そう言っただけで田淵は消え去った。誰にも知られない、誰にも見つかる事の出来ない。この世から消えてしまった植草を、ただ一人その場に残して。

この世には植草と同じ様な人間が数多く存在している。それは『幽霊』『悪魔』『神』と、名称は様々であるが、それらは『この世での存在を消された者』である。

すぐ傍に彼らがいるかもしれない。だが、決してこの世の者と交わる事は無い。

『願いの果てに消えた者』は今日も仲間を待っている。この世では無い何処かで…。

(後書き)

初投稿につき、文法がメチャクチャになっている気がしますがご容赦下さいませ。宜しければ「こうした方がいいよ。」と言つて意見を頂ければと思います。
中傷等にご遠慮ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1890h/>

願いの果てに

2010年10月8日13時26分発行